識字教育と読書普及に関する一考察

――ユネスコ・アジア文化センターの共同出版事業に携わって

竹内　佑利子

児童文学の中に描かれたもっとも好ましいタイプの少女は、と問われれば、私はよろこんでそれは「アリス」ですねと答える。ルイス・キャロル作の『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』の主人公である。アリスは試行錯誤を恐れず、真正面から人と向き合い率直に話す。論理のからむ場面では堂々と応対し、一方限りなく優しい心をもつ。二話のモデルとなった実在の少女アリス・リデルは、十九世紀の英国上流階級の恵まれた環境の中で育つが、例えば『秘密の花園』の主人公であるメリーの傲慢さに陥ることがない。いわば育ちの良さの良い面を具現しているのがアリスである。アリスの作者であり希有な才能をもつ論理学者ドジスン教授（ルイス・キャロル）が少女アリスを熟知していたのにひきかえ、メリーはステレオタイプの物語を書いて程度の低い涙を誘うのを得意とした作家バーネット夫人の空想の産物という相違が、物語中の二人の少女の違いをうんだのだろう。けれどそれだけではなく、アリスがオクスフォード大学のキャンパスで育ったことから、この違いが自然に生じてきたともいえるのではないだろうか。アリスのまわりにいたのは、「物」でなく「人」を、「知識」でなく「思索」を尊ぶ人々だった。このような環境の中で、好奇心旺盛で理性的な、考える子供が育つのはごく自然だろう。アリスは、すべての子供達に読んでほしい児童文学だが、真に楽しめる若い読者は決して多くない。アリスの冒険には、レベルの高い言語体験が可能な環境にいて、かつ論理的な思考体験と読書体験が豊かな少年少女

だけが分かち合える意味の深さがこめられているからである。アリスの本は人間の言語獲得という道程における、象徴的な里程標であると私はみなしている。

この里程標をすべての子供達が越えるようにと願って行われているのが識字教育である。しかしこの里程標に至るまでに越えるべき大小の山の数は、宇宙衛星やロケットがとび回っている現状とあまりに次元がかけ離れている。読み書きの不自由な人々は世界に十億人、その六五から七五パーセントはアジアの人々だといわれる。しかしこの数字すら正確とはいい難い。識字に関心の薄い地域の調査結果はそもそも信頼度に欠ける。また、文字を習得した人（ネオリタレイト）も、雇用契約書に署名ぐらいはできる。誘導されれば投票もできるかもしれない。その段階で識字者と認定してしまう国もある。その他に、物理的に一人ひとりの言語能力を測ることの難しさがある。国の威信を気にする向きもあるだろう。いずれにしても、ネオリタレイトの人々が、好ましくない、あるいは条件の悪い職業について不本意な暮しを送る状況は存在する。また、識字とそれに関わりのある教育の面でいえば、どういいつくろっても、アジアの女性は圧倒的に男性より遅れている。そして成長期に教育を受けられなかった女性達の多くがたどる初志とは異った道については知られているところである。

私はこの数年、ユネスコ・アジア文化センターの共同出版事業編集委員の末席にいて、アジア太平洋地域の子供達のための本の制作に関わっている。年一回、東京新宿区にあるセンターにアジア太平洋地域各国からの編集者が集まり、次年度の出版方針や内容のアウトラインについて討議する。その後アジア文化センターの出版部門の担当者と日本側の編集委員は、具体的な本作り作業に入る。その際のテキストとイラストレーションはあくまで個々の国の作家、画家にゆだねるのが基本方針である。日本の役割は、財政面の他に、印刷や製本、連絡係、パブリシティ等である。

アジア太平洋地域の編集者と円卓を囲む際の本来の目的は、各国の現代の子供達の関心、子供達の現状などの話をすることだが、報告の中にはたびたび子供達を囲む大人達の話が出てくる。そして、この大人達の現状を視野に入れない限り、どんなに良質の本を作っても子供達の手には渡らない、そうしない限り、子供達の未来は今の大人達の日々と変わりはない、再生産はさけられないという暗い予測しかできない。アジア太平洋地域には、日本をしのぐ経済発展をとげつつある国も少なくない。しかし、そういう国にもう識字教育の必要性は無いと、そういいきれない状況が報告される。女に高等教育をという発想が母親の世代になかったために、結果として身

体をむしばんだ女性の話はいつも暗い話題の筆頭である。その母親自身が、自分の人生の意味を無に帰してしまうような価値観の変革を恐れているのかもしれない。

だが、こういう仕事に携わっている我々に投げかけられる疑問もまた多い。最もひんぱんに出される疑問を、先日ある会合でも聞いた。つまり、文字のない社会、口頭伝承が豊かに語りつたえられている社会に外から文字や本をもちこむのは、伝統文化の破壊につながるのではないかという疑問である。有体にいえば、識字教育も読書教育もよけいなおせっかいだという意見である。このような意見を述べる人に限って、最近の大学生は本を読まないなどとぼやく。識字能力や読書への関心は、赤ん坊が生まれてすぐ乳を飲むような生得のものではない。後天的に獲得していく能力であり、関心事である。これば かりは大人、あるいは本と子供の仲介者が、「教える」あるいは「導く」という矛盾をはらんだ義務を引き受けない限り成就されないのである。

さて、先の疑問に戻ろう。伝統文化の破壊者には誰もなりたくないし、まして自分の貴重な時間やエネルギーをそそぎ込んだ結果がそうであったら、これはとんだ悲喜劇だろう。国のあるいは民族の未来をどのように描いていくかは、あるいは選びとっていくかはその構成員の決めることであり、代弁をする権利もその意志も、私にも誰にも無い。ゆえに、私達の答え（る義務）があるとしたら、それは文字が機能している社会を歴史的に考察してほしい、ということである。例えば日本の（今や高校までの）義務教育化、および十人中四人に達する大学進学率はまぎれもなく日本人の選択であると私は思う。日本にもかって豊かな口承文芸や独特の風俗習慣があった。迷信もあった。それらはすべて、ヨーロッパにもあった。だが今では、日本の語り手もヨーロッパの語り手も、先年ベルゲンで開かれた国際口承文芸学会で認識されたように「絶滅寸前」である。外からの干渉もあったが、歴史の流れの中で社会の構成員が選びとってきた結果である。私達は惜しいものを失ったと嘆くこともあるが、多くの人々、とくに女性達は消滅してよかったと思うことが多くある。文字を得て本を得た私達は、失ったものがあった時代よりもはるかに自由に呼吸することができると認識している。

このようなコンセプトに拠って、アジア文化センターでは本作りをし、識字教材を作り、読書普及を働きかけている。実際にどのような配慮がはらわれているか。まず、本を作る場合、テーマも体裁も全て、アジア太平洋地域の各国の編集者達が一堂に会した場で決める。私達日本側編集者も共同討議には積極的に参加するが、編集会議後に行うことは、技術的な側面がおもである。また

アジア文化センターで刊行するのはマスター版といって使用言語は英語である。この版を、各国語版になおして出版するか否かは、あくまで当時国にまかされている。（各国言語版および出版点数、部数は小文の終わりの表を参考にして頂きたい。）今日無文字の国というのは無いけれども、文字が機能していない地域はまだある。その地域の言葉を文字に綴って本という文化を取り入れるか、あるいは伝統文化を護っていくかは、アジア文化センターが決定するところではない。かといって、女性が当然享受すべき権利、果たすべき義務、そして子供達の健康、将来を考えるとき、私達は負の側面を理解しないまま無文字文化を讃えているわけにはいかないのである。まして最近のアジアにおける人的流動性の激しさを思うと、やはりどっちも言い分があるといって済ませるような姿勢は取れないのである。

識字教育や読書普及活動を正当化する、あるいは正当化を裏づける事実はいくらでもある。数例を語ろう。ある国の典型的な家庭を題材にした絵本の原案を見たことがある。父親と母親が農作業に出て、息子達が学校に通い、娘達が家事をする。姉娘が過労で倒れる。妹娘は都会に出ていく。それだけの本である。絵本だから、見開きの頁のまん中に、シーツをかけられた姉の死体が大きく描いてある。これはよくある話だとその国の編集者はいった。そういわれてしまうと、何とわびしい絵本だとコメントしても無意味である。かといって、このまま子供達に手渡したくはない。本である以上、芸術作品を創造したいという願いがある。だから、会議に参加している編集者達は、白い小山のような死体をわきへ寄せるか、もう少し小さく描いたらどうだろうかなどと提案する。大筋は認めるのである。女の子が男の子と手をつないで、小学校で遊戯をしている絵を描いたら、それは嘘になるからである。また、小屋の外にはい出ている老女を村人達がひきずり戻している絵もあった。この老女は病気だが、医師（ほとんどの場合男性）にかかっていない。迷信の場合もあるし、宗教上の制約の場合もあるが、ともかく男性に肌を見せてはいけない社会である。しかしときに苦痛に耐えきれず、医師のところへ行こうとはい出てくる。村人達は、彼女の死後について真剣に考えている。神様の怒りをこうむらないようにとの思いやりから、老女の足をつかんで小屋へひき戻す。誰一人として冷酷なわけではない。社会の伝統に従っているだけである。そしてその絵を描いた画家も、神様との約束のほうを重んじようと伝えるためにその場面を取り上げる場合もある。また、計算ができない妻が買物をしてお釣りをごまかされ、家に帰って夫に張りとばされている絵もあった。これらの社会に識字と本が必要ないかと問われたら私はた

めらうことなく、あると答える側にまわる。

では次にこのような本や絵に描かれていること、つまり、ある社会にとって当り前の場面が、識字教材としての本に取り上げられると、それはどういう効果を及ぼすだろうか。伝統文化を破壊するだろうか。そうかもしれない。語り部や村の長老からかくかくせよ、しかじかするなと教わった基本概念によって成立している暮しが、字や絵になって呈示されるのは一種の衝撃だろう。制作者側の一員として、私はこのような絵本や絵を描く原著者、画家を全面的に支持するわけではない。けれども、自分を見つめ直すための客観判断の材料として評価できると思う。「伝統文化」の保護、保存は重要だが、微力な善意がじわじわと効果を発揮するには時間がかかる。少数民族の文化復興運動がいかに力強く広がっていったかを、私達は六〇年代の記録によって知っているけれども、いったいどこに到達したら満足のいく程度なのか、実ははっきりわかっていないのではないかと思われる。いつかそれも、人類の知るところとなるだろうが、それまで「伝統文化」のにない手ないしはその社会が崩壊しないことが肝要である。では、必要なのは何か。輪を描いて戻るようだが、必要なのは、件の人々に大いに考えてもらうことであり、そのために識字教育と子供の読書教育が必須であると信じる。

スポーツや音楽のすすめと異って、識字教育、読書普及のキャンペーンには、暗いイメージがある。明るい太陽の下、陰気に本など読んでいないで、自給自足の明け暮れを送り、余分な品物の重さにわずらわされることなく、車や宅急便に頼らずとも自分の足で行かれるところで漁労採集を行い、夜が来れば満ち足りた気分でキャンプの火のまわりで語り、歌をうたい踊りをおどる。私だってあこがれる牧歌的な世界だ。けれども、見る目があるならば、男達が賭事に興じている横を重い水桶をかついで通る女達の姿や、息子達は明るい昼間の学校に通い夜は安らかに眠っているのに、娘達は床に置かれた暗い灯火に共用の教科書をくっつけるようにしてのぞきこんでいるそんな有様も、見えてくる筈だ。病んでいる老女の姿などは、よほど目をこらさないと見えないだろう。だからといって、見えませんねで済ませるわけにはいかない。今の日本では、かなり想像力の発達した人々にも理解できない情景だろう。けれど思いがけない勢いでアジアの混在化が進んでいるこの二十世紀末に、識字教育とさらに子供の読書教育がどのような意味を持つか、議論がわき起こるのを待っていられない気持ちで、私達は暗い本作りに励んでいるのである。

次に日本および各国の識字、読書教育について簡単に触れ、それからアジア文化センターの識字教材を具体的

に紹介したい。日本は識字率百パーセントを誇る。しかし本当に「誇って」いてよいのだろうか。児童書の質という点で日本は明らかに英語圏に劣る。日本の子供達の読む本は、英語圏のそれにくらべて、絵が多く、字が大きく、頁数が少ない。それでもまだ、小学校時代は人生のうちでもっとも本を読む時代かもしれない。高学年から中学に至る過程で、ごく少数をのぞいて本を捨ててしまう。私見であるが、幼児、低学年向けの本があまり子供っぽいために、本の本質があやまって理解されているのではないかと思う。「もう大きくなったのだから、本なんて読まなくてもいいんだ」というわけである。アジアのある国では、六歳児の就学率は八〇パーセント、その六〇パーセントが小学校を卒業しないでドロップアウトするという。こんな数字を書くと、日本は知的な国だなあと思われるかもしれない。しかし日本で本を読まなくなる年齢と、発展途上国でドロップアウトする年齢とは奇妙に一致しているのである。日本の子供達は本物の知的好奇心に駆られてではない者も、ともかく教育は続ける。先の国の子供達は、ドロップアウトしなくても、遅かれ早かれ、学校から離れて生活費を稼ぐ暮しに入る。日本が遠い将来はさておいて、現在の生活レベルを保っていかれるのはこの違いがあるからだろう。さて、中学高校時代をもちこたえて本を読み続けても、大学生になったとたんに本から離れるケースもある。多くの場合、周囲の大人に責任がある。親が本を読まない。手紙の書き方がわからないと電話で済ませる。こういう人々は実質的に、ネオリタレイト、あるいは機能的非識字者である。これらの人々が読書風土を形成している日本で健闘しているのは、文庫である。文庫は図書館行政が貧弱な証だといわれてきたが、現在日本全国にある一万以上の家庭文庫は、図書館と協力態勢を組み援助を受けて本を回転させ、地域の読書普及に貢献している。自宅の一部にせよ（玄関口のほんの一坪の文庫もある）地域の子供たちのために開放するのは、実は大変な労力と辛抱のいることである。この文庫運動を支える母親達こそ、将来の日本を背負う子供達のために真に貢献しているといえるだろう。東京には国際児童文庫もあり、世界各国語の本を集めて海外帰国子女、あるいは日本移住者の子弟の本に対する興味を持続させるべく努力している。「ブンコ」は国際語として通用している。英語の本をそなえる日本の図書館はかなりの数にのぼるが、最近各地の図書館から朝鮮語や中国語の本をそなえたいがという質問が私のもとにもくる。

英国では、ゲール語の保存復興運動、および文庫活動が、スコットランド、アイルランド、ウェールズ等で行われている。米国ではどうか。機能的な識字率、つまり

字を知っているだけでなく、書き言葉を駆使する率は百パーセントにならない。それゆえ地道な識字教育と児童読書普及運動が行われている。ピッツバーグ市は児童を対象とするのに母親の再教育から始めるという模範的な活動をしており、注目されている。その他、多言語図書館を開設したスイス、ラジオのお話しおばさんが呼びかけ作ったジンバブエのホームライブラリー、タイの移動図書館、ベネズエラの本の銀行、いずれも、子供をもつ母親達によって地道な努力が続けられている。その創始者達と話していると、暇はないのだ、伝統文化保存はその道の専門家および構成員にまかせておけばよいのだと思えてくる。ニュージーランドの読書教育家ドロシー・バトラーが『クシュラの奇跡』につづる言葉を借りるなら、「本の持つ力に寄せる信頼」はどのような疑問をぶつけられても揺らぐことはないのである。

米国で母親の再教育から児童の読書教育、識字教育にたどりつく例を述べたが、アジア文化センターもまさに同じ考えのもとに教材を作る。そして、アジア太平洋地域における非識字者の悪循環を断ち切るのに貢献している。これらの教材は、識字が健康で幸せな日々を送るチャンスを恵むという認識を促進する。ユニークな発想の教材をご紹介したい。くり返しになるが、アジア文化センターの出版物はすべて英語で作られている。各国が望むならば自国語版を作る。

ボックス・パズル――テーマ：女性は字を学んで、もっと幸せで健康な暮しを送ろう。

紙の箱を四つ組み立てる。色（四色）を合わせると、絵と文字が浮かび上がってくる。それぞれのメッセージは左記の通り四つあるが、むろん最後の「子供の教育」が主たる狙いである。1、健康と衛生＝女性が識字教室に通うようになれば、家族のみなの病気の予防と応急処置ができるようになる。2、社会活動への参加＝女性が識字教室に通うようになれば、村や共同体の発展に寄与できる。3、予算＝字を覚えた女性は家計の予算を立てることができる。4、子供の教育＝字を知っている女性は、子供の将来を明るくする。

ジグソー・パズル――テーマ：幸せな暮しのために、賢い水の利用を。

井戸があって汚水の流れこむ川の水を飲料に使わないで済む村の様子が描かれた、ジグソー・パズルである。紙は貴重だから、裏も使ってパズル絵が描かれている。飲み水の改善によって、多くの病気が防げる。その動機づけを意図して作られている。

スゴロク――テーマ：幸せな共同体。

説明には、用意するものはダイス一個、それに人数分の小石。各枠の中に書かれている文章を読んでから次の

枠へすすみましょう、と書かれている。遊びながら声にだして読む練習ができる仕掛である。スタートの次の一番の枠には、「みのりあるひびは、どくしょから」そして、ゴールの手前の二二番の枠には、「ほんは、まいにちのくらしのやくにたつ」と印刷されている。

小冊子――テーマ：暮しの科学。

「魚には酸素が必要です」「よりよい暮しのために生活協同組合を作ろう」「毎日の暮しに役立つかんたんな知識」などのタイトルのもとに、薄い冊子が作られている。最後の知識集はしゃれたカレンダーのような体裁で、必要な箇所をそのつどめくって見ることができる。例えば、子供が熱を出したときは「高い熱を下げるには」の頁をめくる。すると、「バナナの茎をナイフでそぎ、水に浸してから、体じゅうにはります。熱はすぐ下がるでしょう」といった具合いにノウハウを伝授してくれる。当番医の電話番号が記されている自治体の便利帳のようなものである。

ポスターは様々のものがある。「本を読もう」という力強いポスターには、虹の絵とともに、読書はあなたの人生をより幸せに豊かにするでしょう。読書からそれは多くを学ぶことができます。農作業について、家畜の世話について、選挙のこと、健康な日々のこと……と書かれている。

その他飲み水のための木炭の作り方や、「女の労働を軽減するために」井戸の掘り方についてのポスターもある。これらの教材はすべて、紙、それも折りたためば持ち運びがらくになるように工夫されているものばかりである。ビデオや映画の教材をという提案もあったが、井戸のない村、おそらく発動機が一台しかない村でビデオの上映は非現実的である。というわけで、紙芝居やスゴロクが活躍するのである。内容について、日本の読者諸氏は、何と素朴、あるいは低レベルな教材だと思われるかもしれない。しかしこれらの教材は、実際にアジア太平洋地域で着実に成果をあげている。教材の絵は単純な線と中間色を多用したやさしい筆づかいで描かれ、どれもあたたかい味がある。

最後に、国際識字年のために、ユネスコ本部からの要請でアジア文化センターが制作した『なにをしているかわかる？』について一言記したい。これは先に述べたドロップアウトした若者向けに、識字教室へ通ってほしいという願いをこめて作られた。文字を使ったあれこれの遊び――スゴロク、なぞなぞ、海の生物、地図、手紙、人形劇――が、世界の民族色豊かな各地を舞台に、子供によって紹介されている。終りの舞台は、アメリカはニューヨークである。語り手はスーザン。スーザンはいう――Hello! My name is Susan. I live in a big city

where people come from all over the world. Can you find me? Guess what I am going to do! I am at a conference of the Children's United Nations. We met, because——

——We want to find out about each other.

——We want to be good friends.

——We want to be able to read and write.

——And we want a better world for us all!*

日本語版（松岡享子訳、朝日新聞社）は大きな反響を呼んだ。これは字を知っている子供達にも、大人達にもおもしろく、刺激的で、何より美しい本だからである。学校へ満足に通えなかった人々へというような、日本人には「関係ない」意図で作られた本だからといって敬遠したら、その分すばらしい物を見落とすことになるだろう。つまり、これは本のもつべき要素をすべてそなえているのである。この本きれいでおもしろいでしょう、とアリスに聞いても、聡明なこの少女は、「あなたの意見なんか誰も聞いていません」ときっぱりいうことだろう。本から目も離さずに。

* Guess What I'm Doing! pp 44-47, Asian Cultural Centre for UNESCO, 1990.

追　記

1、識字の本は、基本的に無料でなければ、子供達の手にわたらない。そのために、ユネスコ・アジア文化センターでは、地域語版制作と配付の募金を行っている。

2、ユネスコ・アジア文化センターの編集会議は、オブザーバー、リソース・パースンの参加を歓迎している。本学経営学部の学生も、会議を傍聴して感銘を受けた、と述べている。

1、2、のいずれについても、左記に連絡して頂きたい。

ユネスコ・アジア文化センター

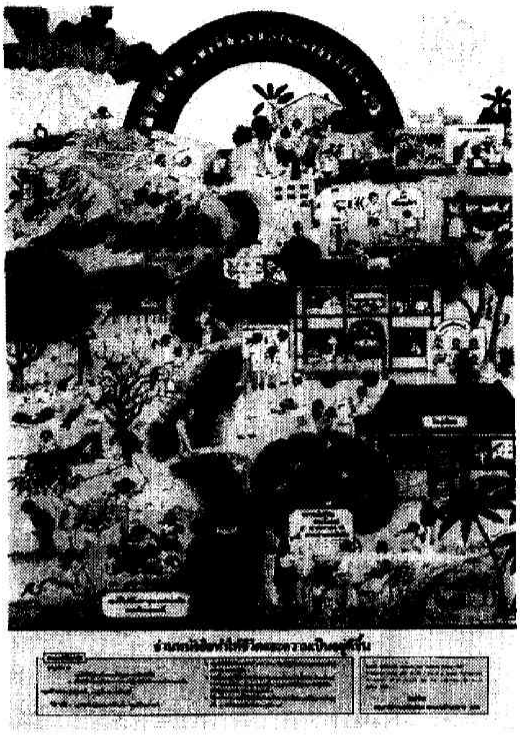
〒162　新宿区袋町6（電話〇三―三二六九―四四三五）

（たけうち・ゆりこ／経営学部専任講師）

1. Materials of AJP and Its Local Versions

Posters

Let's Read



Thailand (Thai)

Sanitation

Malaysia (Malay)

© ASIAN CULTURAL CENTRE FOR UNESCO, 1989

Bangladesh © ASIAN CULTURAL CENTRE FOR UNESCO, 1989

Let's Play Asian Children's Games	Stories from Asia Today			My Village, My Family, My Asia	Wonders of Our Asia	Laughing Together	Together in Dramaland	"Can You Find Me?"	Making Toys & Playing Together
	1	2	3						
5,000	5,000	*5,000			*			*	
5,000	5,000	5,000	20,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	
3,000 *3,000 *3,000 (Bengali) 3,000 3,000 (Tamil) (Malayalam)	2,500 2,500 2,500 (Bengali)				*	3,000 3,000	*		
10,000 *5,000 *5,000	10,000	10,000		5,000 *5,000	*				
5,000	*10,000 8,000	*10,000 11,000	16,000	26,500	5,000	7,000		*30,000 15,000	3,000
	10,000	10,000	10,000	10,000		5,000	3,000	* 5,000	
1,000				2,000 2,000	2,000	2,000		2,000 *	
1,000	1,500	1,500	3,000	2,000		2,000	*	2,000	
	5,000	5,000		*5,000		2,000			
46,000 21,000	40,000 45,000 10,000	50,000	192,000	48,000 21,000	* 52,816 *	* 48,000 *	43,000	* 48,000	*43,000
88,000	111,500	142,500	221,000	131,500	64,816	77,000	51,000	107,000	46,000
4,000 2,000 3,000									
7,000	6,000	6,000	33,000	3,000	2,000	2,000	2,000	3,000	2,000
16,000	6,000	6,000	33,000	3,000	2,000	7,000	2,000	3,000	2,000

Total of Asian Languages: 2,938,666 copies (26 lgs of 18 countries)
Total of European Languages: 163,600 (9 lgs of 8 countries)

Remarks * shows the publication to be completed in near future.

NUMBER OF COPIES OF ACP LOCAL VERSIONS

		Folk Tales from Asia						Festivals in Asia	
Country	Language	1	2	3	4	5	6	1	2
Bangladesh	Bengali	10,000	10,000	*	*				
Burma	Burmese	*5,000	*5,000	9,000					
China	Chinese	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000
India	Hindi	3,000		*3,000				2,000	1,000
	English	3,000		*3,000				1,000	2,000
Assamese, Bengali Gujarati, Kannada, Malayalam, Marathi, Tamil, Urdu		2,000 x 6 (except Malayalam) 4,700 (Kannada)		2,000 each x 6					
Indonesia	Indonesian	71,000	71,000	78,150	83,150	83,100	20,000	10,000	34,600
	Javanese	5,000	5,000					5,000	5,000
	Sundanese	5,000	5,000					5,000	5,000
Iran	Farsi	50,000	50,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	
Japan	Japanese	45,500	29,500	20,500	17,500	13,000	8,500	7,000	6,000
Kampuchea	Khmer	13,000	13,000						
Laos	Laotian	75,000							
Malaysia	Malay	14,000	14,000	24,000	24,000	21,000	16,000	10,000	10,000
Maldives	Divehi								
Mongolia	Mongolian	*30,000	*	*	*	30,000			
Nepal	Nepali	5,000	5,000	5,000	5,000				
Pakistan	Urdu	5,000		5,000				5,000	
Philippines	English	4,500	4,500	2,000	2,000				
	Filipino	*5,000	5,000						
Rep. of Korea	Korean	3,000	3,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	
Singapore	Chinese	6,000	6,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000
	English	11,000	11,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000
Sri Lanka	Sinhalese	5,000	5,000					5,000	*5,000
	Tamil	2,000	2,000					2,000	*2,000
Thailand	Thai	48,000	48,000	48,000	48,000	45,000	45,000	50,000	50,000
Viet Nam	Vietnamese	published (from 1-6) 51,000							
Asian languages: Total		732,700		469,300		361,600		280,600	
Denmark	Danish	2,000	2,000	(selected from 1-6)					
	Faroese	1,800	1,800	(selected from 1-6)					
Finland	Finish	20,000		(selected from 1-6)					
Sweden	Swedish	1,500	1,500	(selected from 1-6)					
Norway	Norwegian	1,000	1,000	(selected from 1-6)					
Portugal	Portuguese	5,000		5,000					
Spain	Spanish	20,000		20,000		20,000			
France	French	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000		
Hungary	Hungarian	20,000 (from 1-6)							
Master editions English USA, Japan & Singapore		13,300	13,300	9,000	6,000	6,000	6,000	4,000	4,000
European languages: Total		114,200		50,000		42,000		8,000	

Grand Total: 3,251,866 copies (38 Languages/26 countries)

© ASIAN CULTURAL CENTRE FOR UNESCO, 1989

NUMBER OF LOCAL EDITION BY TITLE

Country \ Title	Folk Tales			Festivals		Games	Stories			My Village My Family My Asia	Wonders of Our Asia	Laughing Together	Together in Dramaland	Can You Find Me?	Making Toys and Playing Together	Total
	1&2	3&4	5&6	1	2		1	2	3-6							
1. Afganistan																
2. Australia																
3. Bangladesh	O						O	O						*		4 (1)
4. Burma (Myanmar)	O	*	*													1 (2)
5. China	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O		17
6. India	O	O		O	O	O						O				8
7. Indonesia	O	O	O	O	O	O	O	O	O					*		12 (1)
8. Iran	O	O	O	O	O		O	O				*	*	*		10 (3)
9. Japan	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O		O	O	17
10. Kampuchea	O															2
11. Laos	O													*		2 (1)
12. Malaysia	O	O	O	O	O		O	O	O	O		O	*	O		14 (1)
13. Maldives																
14. Mongolia	*1		O5													1 (1)
15. Nepal	O	O														4
16. New Zealand																
17. Pakistan	O	O		O	O	O				O		*	*	*		8 (3)
18. Papua New Guinea																
19. Philippines	O	O								O				*		5 (1)
20. Rep. of Korea	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O		O	*	O		15 (1)
21. Singapore	O	O	O	O	O		O	O		O		O				12
22. Sri Lanka	O	O	O	O	O		O									9
23. Thailand	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	O	*	17 (1)
24. Vietnam	O					O	*	O		O						5 (1)
Total	36 (1)	26 (2)	19 (2)	11	11	8	10 (1)	10	6	9	3	7 (2)	2 (4)	5 (6)		163 (17)

O = published * = under preparation

© ASIAN CULTURAL CENTRE FOR UNESCO, TOKYO, 1989